アジアスカラシップ報告

地方視察で日本の底力知る――7月に長野県訪問

日本経済研究センターと日本経済新聞社がアジアの中堅・若手研究者を日本に招き、アジア経済や国際関係について研究してもらう「日経アジアスカラシップ」はこの夏、第2年度を終えた。中国、インド、タイ、フィリピンから選ばれた研究者たちは２年間で計６人。東京・日本橋茅場町の日経センターを拠点に、それぞれのテーマに従って研究にいそしみ、成果を上げているが、センターではこれに加え、課外活動として地方への視察旅行を実施してきた。

最新の視察旅行で訪問先に選んだのは長野県。フィリピン開発研究所APEC研究ネットワークから出向のジェニー・バルボアさんが対象で、米ジョンズ・ホプキンス大大学院からインターンシップで来ていたジャスティン・スローンさんも自費で参加。７月中旬、長野市や飯綱町、諏訪地方などを２泊３日で回った。

最初の訪問先は長野市からJR線で約30分の牟礼駅にほど近いサンクゼールの本社。緑豊かな丘陵の上に立つジャムやワインのメーカーで、全国のショッピングモールなどに約30の店舗を持つ。敷地内にあるワイナリーや店舗、レストランを久世良三社長自ら案内していただいた。

バルボアさんらの関心を特に強く引いたのは、久世さんの起業から今日に至るまでの波乱に満ちた「ヒストリー」だった。慶応大時代に競技スキーのクラブに所属し、冬はスキーざんまいだった久世さんは、卒業後、大手スーパーの営業マンを経て、長野県の斑尾高原にペンションを開業。地元産の果物を使った妻まゆみさん手作りのジャムが評判になったため、ジャムのメーカーに転進することを決断した。1979年のことだ。

欧州の「田舎のもてなし」をビジョンに定めた事業は順調に伸びたが、バブルの崩壊とともに資金繰りが逼迫、倒産の淵に追い込まれた。様々な人たちの好意も得てなんとか危機を乗り越え、自家製くるみバターが長野五輪の公式ライセンス商品に選ばれたのをきっかけに立ち直っていった……。

波乱の起業史に聞き入る

わずか10万円で始めた手作りジャムの商売が年商約30億円の食品製造・販売企業に育つまでのストーリーにバルボアさんらはじっと聞き入り、サンクゼール本社訪問は予定を大幅に超えて、いつの間にかブドウ畑の向こうの山々は夕日に染まっていた。

翌日は諏訪湖のほとり諏訪地方を訪ねた。まず、長野県を代表する企業の一つ、セイコーエプソンの塩尻事業所で高級時計の組み立て工程を見学。量産品と違って、高い技術を持った技師が腕時計を１個ずつ部品から組み立てて作る高級時計。製品の細部の細部に至る精巧さと究極の職人の技術によるモノづくりの粋だ。なかには１個

1500万円もする品もあり、実物を見せてもらって一同目を丸くした。

午後は岡谷市の宮坂製糸所へ向かった。岡谷といえば、明治以降、近代的な製糸工場の煙突が林立して「糸都岡谷」の名をほしいままにする時代もあった。しかし、戦後、化学繊維や中国産などの安価な絹糸の輸入に押され、ほとんどの製糸工場が姿を消した。今、岡谷に残っている製糸工場は宮坂製糸所たった１軒。全国でもわずか４軒に過ぎない。

しかも、宮坂製糸所では明治初期にイタリアやフランスの製糸機械を参考に作られた諏訪式座繰機と日本古来の繰糸法を改良した上州式座繰機で絹糸を繰っている。ベテランの女性の職人さんが器用に熱湯のなかのまゆ玉から絹糸を取り出していく姿を一同、飽きもせず眺め続けた。宮坂照彦社長は「桑を作る農家も減ってきて風前の灯です」と実情を話していたが、自然な風合いを出すため、人為的に糸に節を作る機械を考案するなど意気軒高だった。

この後、岡谷蚕糸博物館にも立ち寄って諏訪製糸業の興亡史を学んだ。この日の諏訪地方訪問の狙いは、ここに日本の製造業の最先端の一つである精密機械、電子機器産業があり、素朴な製糸業がその原点だという日本の製造業発展の歴史を知ってもらうことだった。

明治以来の座繰り製糸の作業に見入る
バルボアさん（右端）ら

企業人との触れ合いを評価

小布施町にある栗菓子の小布施堂では、江戸末期に葛飾北斎のスポンサーだった旧家としての面影を残す白壁の蔵から、最新の施設である和風モダンなホテルまで敷地内を市村次夫社長に案内していただいた。ごく普通の田舎町だった小布施を「町並み修景」することで人気観光地に仕上げるため尽力した市村さんの文化を軸にした経営哲学に夜が更けるのも忘れて耳を傾けた。

視察旅行を終えたバルボアさんは「様々な発展段階の日本企業に対する深い理解が得られた。特に企業経営者の人たちと直接話す機会を得て、日本経済の『顔』が見えた気がする。また、日本が高度な経済発展の一方で素晴らしい自然を保全してきたことに気付いた」という感想を寄せてくれた。

日経アジアスカラシップでは第１年度に愛知県（トヨタ工場など）、長岡市・小千谷市（越後製菓、久須美酒造など）、関西（大阪大、古野電気など）の地方視察を実施、第２年度も長野県のほか愛知県、川越市の視察を行った。参加者からは「日本の強さが東京だけではなく地方にもあることを実感できて勉強になった」と評価されており、今後もスカラシップ事業の重要な柱として地方視察を続けていく方針だ。最後に、快く受け入れてくださった企業や団体の方々、いろいろと協力していただいた日経の支局の皆さんにお礼を申し上げたい。

（アジア研究部担当　大橋牧人）